FEEL Sendai　成果報告

2004-2020

FEEL Sendai〔杜の都の市民環境教育・学習推進会議〕
事業の振り返り　2004-2020

今年度はコロナ禍において、普及啓発イベントなどが思うように実施できない状況が続き、苦しい１年となりました。FEEL Sendai も例年実施してきた活動が次々と中止になり成果をあげられない中で、これまで実施してきた事業を振り返り、実績の評価と今後に向けての見直しを行いました。その内容をご報告いたします。

2021 年 3 月

目次

［環境社会実験］未来プロジェクト in 仙台　…　１
杜々かんきょうレスキュー隊　…　３
環境フォーラムせんだい　…　８
せんだい環境ユースカレッジ　…１２

【資料編】　…１７

［環境社会実験］未来プロジェクト in 仙台

１．概要

［環境社会実験］未来プロジェクト in 仙台は、市民やNPOとの連携や波及効果が期待できる先進的な環境問題の取り組みを募集し、公開コンペにより審査・決定する事業です。

選ばれた取り組みには1年間の資金援助を行い、途中経過と結果を報告していただくとともにFEEL Sendaiの担当委員が活動アドバイスを行い、支援期間中のみならず支援後の発展や波及効果も期待するプロジェクトです。

単純に環境に資する取り組みに資金援助するというよりは、先進的な内容であり将来に向けた発展性を兼ね備えていることを重視しています。

２．経緯

この事業は、FEEL Sendaiの発足より早い2001年に仙台市の仙台開府四百年記念事業として「環境社会実験」の名前でスタートしました。その名の通り、様々な地球環境問題を解決するための先進的なアイデアを募集して社会実験として実践することで、効果や問題点を探り、将来的に定着するような取り組みを発掘する事業として始まっています。

市民、NPO、民間企業などが連携しながら実験的な取り組みを行うことで、持続可能な社会の構築に貢献することを目的として、毎年取り組みを公募し採択を続けてきました。

2004年、FEEL Sendaiの発足に際し、FEEL Sendai事業の1つに位置付けられました。2007年からは名称を「持続可能な未来プロジェクト in 仙台」に改称して継続しています。

さらに2010年には、幅広く募集し、小さな団体でも応募しやすいように内容を見直し、援助金額を2段階に分け、「環境の芽部門」「環境の樹部門」を設置し、名称も「［環境社会実験］未来プロジェクト in 仙台」に改称し、現在に至ります。

３．実績

資料編をご参照ください。

４．評価

実施内容や応募件数などに変化はありますが、2001年から19年間継続実施してきたことの価値は大きく、仙台地域における個性的・先進的な環境取り組みの発掘に一定の成果を上げてきたことは間違いありません。

プロジェクトの初期には、市民協働の手法を探るという狙いにも合っており、趣旨にまさに合致した実験的な取り組みの応募が多かったように思います。採用プロジェクトの中には、実施中に確立した環境配慮手法が、現在でも定着しているものもあり、こうした実績は大きく評価できると考えます。

例としては、朝市夕市ネットワークが実施した、合同市での乾燥生ごみと野菜の交換による生ごみリサイクルは現在でも継続実施されています。みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）が実施したプロスポーツの試合会場におけるエコステーションの設置・ごみの分別方法及び普及啓発は、仙台スタイルとして定着し、現在もプロスポーツのボランティアにより継続実施されています。水環境ネット東北が立ち上げた「広瀬川１万人委員会」による広瀬川の清掃活動等は活動の広がりを見せ現在も継続しています。

また、一般的な助成事業などとは違い、プレゼン　⇒　経過報告　⇒　アドバイス　⇒　結果報告という段取りを踏むことで、活動内容のブラッシュアップや改善にもつながることは大いに意義があります。採用された団体は年間に何度もFEEL Sendai事務局と連絡を取り合うことにもなるので、FEEL Sendai とのつながりができ、採用団体がFEEL Sendaiの他の事業に関わるような波及効果も生まれています。

５．課題

当初に比べて、ここ数年応募件数が減少傾向にあり、採用団体が交流する機会も減っています。他の助成事業と比べて求められる書類や成果報告など負担が大きいという声も一部にあります。

また、本事業の趣旨を十分に理解することなく普通の助成事業ととらえて応募しているのか、先進性や発展性に少々疑問のある取り組みも見受けられるようになりました。以前に比べて、柔軟かつ大胆な企画が少なくなっているように感じます。

６．今後に向けての提案

応募件数を上げることで解決する課題もあると思いますので、広報戦略を練り直して新たな広報手段や幅広い告知を心掛け、趣旨を理解し意義を感じてもらえるよう努力していく必要があると思います。

また、市民に対する本プロジェクトの成果発信にこれまで以上に注力し、成果を知ってもらうことがプロジェクトの価値を高め、応募件数を上げることにつながる可能性もあります。

事務的な内容としては、可能な範囲で書類の簡素化など採用団体の負担軽減を図ることも有効と思われます。

活動の広がりや連携という観点からは、これまでの採用団体が関われる場づくりや、FEEL Sendai委員が協働で環境社会実験を実施してみるなどのこれまでと違うアプローチも検討価値があると思います。

いずれにしても20年の節目を迎え、本事業の内容自体を社会実験として発展させていくべき時に来ているのかもしれません。

杜々かんきょうレスキュー隊

１．概要

杜々かんきょうレスキュー隊事業は、環境 NPO などによる環境学習プログラムの作成や、作成した環境学習プログラムの体験実践を支援する事業です。

杜の都仙台の特色ある自然環境・社会環境を素材として作成された環境学習プログラムを、子どもたちを始めとした市民に体験してもらうことで、地球規模・地域レベルの環境問題について考え、地球や地域を救うために環境に配慮した行動の取れる人（＝杜々かんきょうレスキュー隊員）を育成することを目的としています。

２．経緯

この事業は、2003 年度に環境省の「体験的環境学習推進事業」を仙台市環境局が受託して開始し、2004 年度までは仙台市の事業として行われていました。FEEL Sendai の設立後は、この事業の多面性・多機能性が FEEL Sendai の活動趣旨に合致し、行政が単独で行うより大きな効果が出ることが期待されたことから、2005 年度より FEEL Sendai の事業とすることになりました。

FEEL Sendai 設立以前の 2003 年度から作成されたかんきょう学習プログラム名と作成団体名は別表のようになっています。2003 年には作られたプログラムをまとめ＊杜々かんきょうレスキュー隊活動マニュアル集（発行：仙台市）が作られました。これは現在のプログラム集の前身となるものです。

FEEL Sendai 設立以前は、様々な角度から環境へアプローチする環境学習プログラム集を作成することに重点を置く傾向にありましたが、FEEL Sendai 設立以降は、2003～2005 年度の蓄積を引き継ぎ、普及・発展をはかるとともに、時代のニーズに合致した新規プログラム開発などを、幅広いネットワークを活用して行っています。

プログラム作成事業と同時期に並行して 2004～2006 年度に、仙台市主催の環境学習プログラム作成・実践講座が開催されていました。環境教育・学習活動に関わる方に、環境学習プログラムづくりと実践に関するノウハウを習得してもらうために、宮城教育大学環境教育実践研究センターと連携し、各年度のテーマに即した講座を開催しました。受講対象は、当該年度環境学習プログラムを作成する環境 NPO のほか、小中学校の教師や一般市民としており、環境学習プログラムの作成・実践に携わる人材の育成に加え、宮城教育大学・環境 NPO・教師等との協力関係の形成・強化をも図られました。また、人材の育成だけでなく交流や情報交換の場にもなっていました。

この講座は環境活動を行う NPO メンバーにとって専門家から直接学び、その後の活動への指導や連携をいただける貴重な良い機会となったという感想もありました。

2003 年度の環境学習プログラム作成後、作成された環境学習プログラムの普及のため、作成団体が学校に赴き講師をつとめる「モデル実践事業」を行っていました。小中学校を対象に公募し、希望のあった学校において実施しています。終了後、参加した教師や講師をつとめた団体にアンケートを行い、得られた結果は事業の改善に活用しています。

2004 年度（2003 年度作成プログラムの普及）には、3 プログラムを小学校 3 校へ、のべ 5 件の実施から始まり、2008 年度に「[環境社会実験] 未来プロジェクト in 仙台」事業の応募採用件数が減少したことから、その予算を杜々かんきょうレスキュー隊のプログラム体験実践に運用し、プログラム活用が広く認知されました。さらに、2009 年度には、保育所や幼稚園等を対象に加えるなど、年々普及の規模を拡大させてきました。

さらに、FEEL Sendai として行うモデル実践事業以外でも、作成団体が自主的に実践を行うほか、学校が仙台市の支援制度を活用し授業に取り入れるなど、作成されたプログラムは広く活用されてきました。

こうして、杜々かんきょうレスキュー隊事業は、日本の環境教育・環境学習の背景に沿って、FEEL Sendai の柱の 1 本を担ってきています。

３．実績

環境省の「体験的環境学習推進事業」を仙台市環境局から引き継ぎ FEEL Sendai の事業として「杜々かんきょうレスキュー隊」はその後もその年度にふさわしいテーマ、必要とされるテーマを設定して作成団体を公募して環境学習プログラムを蓄積してきました。

2014 年は「地域の環境と防災」をテーマに作成団体を募集しましたが、応募がなく、翌年の 2015 年度には「[環境社会実験] 未来プロジェクト in 仙台」事業を行った団体に環境学習プログラムとして再構成を依頼するなどしてきました。

2017 年度以降はテーマを設定せずに公募し、新しい団体の参入もありました。2020 年度は新型コロナウイルス 感染防止の為、新規プログラム作成の公募が行われませんでした。

環境学習プログラムを作成する過程において、プログラムを実践・検証を行う為の体験授業が行われます。その検証の後に環境学習プログラムは完成します。完成したプログラムは環境プログラム集に掲載され、広く学校、幼稚園、保育所、市民センターへと体験利用を促します。その結果として、表に示すように、現在多くの小学校、保育所、幼稚園で利用されています。

●表：杜々かんきょうレスキュー隊実績

年度	プログラム作成団体数	テーマ	プログラム利用団体数				
			小学校	中学校	保育所幼稚園	その他	合計
2003	6	水					
2004	6	生活環境	5	0	0	0	5
2005	6	食	13	1	0	1	15
2006	4	炎・明かり	9	1	0	0	10
2007	3	緑	18	1	0	0	19
2008	3	幼児向けプログラム	29	1	0	0	30
2009	4	地域	35	0	10	0	45
2010	3	いのちのつながり	39	0	15	0	54
2011	0	（中止）	32	0	12	0	44
2012	2	地域の復興	28	0	25	0	53
2013	1	わたしたちのくらしとエネルギー	24	1	29	0	54
2014	0	地域の環境と防災	27	2	30	0	59
2015	2	（公募を行わず依頼した）	27	1	43	0	71
2016	1	自然環境・自然の力	33	0	38	0	71
2017	0	（テーマを設定せず）	34	0	36	0	70
2018	1	（テーマを設定せず）	27	0	54	0	81
2019	1	（テーマを設定せず）	28	0	56	0	84
2020	0	（中止）	25	0	0	0	25

４．評価

学校教育の中に「総合的な学習」「生活科」が位置付けられ、学校現場で「環境」が取り上げられるようになるのに先駆けて、杜々かんきょうレスキュー隊事業のプログラムは、環境に特化したNPOが総合的、持続可能な社会を基礎において作成されたものです。教育現場にESDの概念が少しずつ浸透し杜々かんきょうレスキュー隊事業のプログラムの価値に追いついてきた印象を持ちます。

2006 年度以降もテーマを設定してプログラム作成の応募を行ってきましたが、2011 年に東日本大震災があり、仙台市は復興・再生、子どもたちの心身のフォローに教育の重点がおかれ、環境教育から防災教育に移行した傾向があります。2020 年度は新型コロナウイルス 感染予防対策のため、プログラム作成事業はありませんでしたが、今後はSDGsを念頭においた環境学習プログラムが求められると予測されます。

その一方、「モデル実践事業」開始当初5件でスタートした体験実践数は、2019年には84件まで増加しました。2020年度は、新型コロナウイルス感染症予防対策を講じながら、規模を縮小して25件実施しました。また、ここ数年は、小学校と保育所・幼稚園がほぼ同数、或いは保育所・幼稚園の利用が上回る傾向にあります。保育所、幼稚園での利用が増えている要因としては、幼児の発達段階に適したプログラムであること、更に保育所、幼稚園相互の連携が密であり、学習会が頻繁に行われ、環境学習プログラム体験の情報交換がなされているからであると報告されています。

プログラム一つ一つは、魅力がありながら、体験的な活動を主体とするプログラムに利用の偏りが見られ、小学校の活用数はやや減少傾向にあり、利用学校も固定化しつつ

あります。これには、教育現場ではプログラムを実施するために準備が難しいもの、例えば水辺の環境学習の際のライフジャケット、教材として完成された準備物、備品を揃えて準備万端の団体によるプログラムには魅力があり、教育現場のニーズにもマッチし、希望が増える傾向となっています。

５．課題

テーマを掲げて環境へアプローチを図った 17 年にわたる環境学習プログラム作成事業は、プログラムを作成し事業を盛り上げてきてくださった環境団体の高齢化、活動のマンネリ化等、多くの課題を抱え新しいプログラム作成に力を向けられない状況になりつつあります。そのため、作成団体も利用団体も固定化し、減少しています。

また苦労して作成したプログラムもあまり活用されず、モチベーションが低下すること、各団体の交流の機会もなく各団体の活動の中だけで環境活動のねらいが完結してしまうなど、プログラム作成の応募意欲へ繋がらなくなっています。それには、教育現場の中で、環境学習プログラムがどのように位置付けられているのか、位置付けたら良いのか活用されるための環境学習プログラム作成・実践講座が、専門家、環境団体、教育者、市民らが協働・連携して見直しをする必要性があると思います。

プログラム体験事業では、事業開始時のねらいとして、1 回目はプログラムを作った団体が実施し、2 回目以降は、活用した団体の指導者が講師として教師が実施することを想定していました。しかし、環境学習プログラムの普及のため、作成団体が学校に赴き講師をつとめる「モデル実践事業」を行うことにより、2 回目以降も作成団体が活動を実施することが多く、教育現場における教師によるプログラム実践の拡がりをみない結果になっています。実際指導者がプログラム集を見て実施するには、用意する物が多い、団体独自の教材、シチュエーション条件が合わない等、ハードルが高いプログラム内容となっています。プログラムの一つ一つは内容の濃い魅力的な環境学習プログラムです。

小学校での体験実践利用数を増やすためには、教育現場で多様性のある環境学習に活かすプログラムの普及が不足している現状です。

６．今後に向けての提案

仙台市より引き継いだ杜々かんきょうレスキュー隊事業の目的は、「杜の都仙台の特色ある自然環境・社会環境を素材に、環境 NPO などが環境学習プログラム作成し、子どもたちを始めとした市民に体験してもらい、地球規模・地域レベルの環境問題について考え、地球や地域を救うために環境に配慮した行動の取れる人（＝杜々かんきょうレスキュー隊員）を育成すること」を守り続けています。その方式として事業開始時は、1 回目はプログラムを作った団体が実施し、2 回目以降は、活用した団体の指導者が講師として教師が実施することを想定していましたが、今なお作成団体が訪問実施する方式に変わりがありません。教師にとって、作成団体が直接実施することの魅力、手軽さの両面を秘めているからでしょう。しかしながら、利用される学習プログラムの偏り、利用する学校、保育所、幼稚園の固定化の傾向をみる現在、これまでプログラムを利用した団体に聞き取り調査を行い、プログラムの見直し、改善が求められると同時に、教育現場の指導の中で一つ一つのプログラムが教科の中でどのように位置付けられるのか、

活用すべき或いは応用できる場面を具体的に示していくことによって今以上に活用されるようになるのではないかと考えます。

例えば、プログラムの活用を広げるためには、FEEL Sendai から学校・幼稚園・保育所に環境教育・学習のコーディネーターとして訪問し、活用方法を説明し、相応しいプログラム選定の手伝いをすることも良いかもしれません。他にも、現在は年度内で、同一の対象者につき 1 回まで応募が可能となっていますが、数を決めず、いくつかの関連したプログラムを受講してもらうことにより、総合的環境学習として、子どもたちだけでなく、現場の先生方にも、持続可能な社会の視点について理解を深めてもらうことができるかもしれません。

このように多方面からアプローチした環境学習プログラムを活用することが SDGs に近づくために必要だと思います。

また、杜々かんきょうレスキュー隊マニュアルの活用を促すために、デジタル化して、#(ハッシュタグ)を付けることも良いでしょう。そうすることで、環境に関わる語句での検索ができるようになります。例えば、#生物多様性、#SDGs、#地球温暖化、#気候変動、#命の繋がり、#海洋ゴミ、#脱炭素、などです。

さらに、過去にプログラム作成した団体からプログラムを改編し引き継いだ別の実施団体が誕生したように、プログラムは残っているが、実践不可能になっている休眠プログラムがあるので、作成団体の許可を取り、再生させることも活性化の一助となります。あるいは、FEEL Sendai 委員が自らプログラムを作成して、そのプラグラムを実践してもらえる団体を見つけることも、環境団体の掘り起こしに繋がり新しい展開となるでしょう。他にも本年のように新型コロナウイルス 感染防止対策の指針を明示していく新たな必要性も求められています。

2011 年の東日本大震災から立ち直り再び環境都市仙台の環境学習に教育現場も戻りつつある今、17 年にわたり積み上げ、蓄積してきた環境学習プログラムに息吹を吹き込み直す時が来たのではないでしょうか。市民協働の一人一人の Life Style になるまでの環境教育が求められています。

環境フォーラムせんだい

１．概要

環境フォーラムせんだいの前身は 2001 年から始まっており、2004 年設立の FEEL Sendai よりも前から実績を積んでいた事業です。この事業は、仙台市と仙台を中心に環境活動を行う様々な組織や人々が並列につながり協力して市民への普及啓発活動を行うことを目的としています。

仙台市は現在 FEEL Sendai 事業に位置付け会場予約や資金援助などのバックアップをしていますが、この事業は仙台市の企画のもとに出展者を募るという形ではなく、環境団体・企業・大学・個人等の参加希望者で構成する実行委員会で毎年ゼロから話し合い、企画するという形をとっているところに特徴があり、FEEL Sendai の事業の中でもその運営に独自色が強いものとなっています。

２．経緯

環境フォーラムせんだいは、環境フォーラムせんだい〇〇〇〇実行委員会が主催となって取り組んできたものが、FEEL Sendai の結成とともに FEEL Sendai の事業として位置付けられるようになりました。2001 年に仙台開府四百年記念事業として、仙台国際センターで開催された環境国際会議のサイドイベントで、仙台の環境団体等が出展したことが、環境フォーラムせんだいの前身にあたります。その時の仙台市担当者と出展した環境団体有志が、1 年で終わってしまうのはもったいないので来年以降も環境団体が集まるイベントを開催しようと計画したのが「環境フォーラムせんだい」の始まりです。その後、グリーン購入フェスタとして行われたりしましたが、2005 年以降市民団体が環境問題を取り上げて発表する形式になり、教育委員会の環境教育発表会も併設されました。会場はアエルや科学館などで開催されていましたが、メディアテークで 12 月に開催することとなりました。当時の環境団体有志が自ら実行委員会を立ち上げ、仙台市環境部署の協力のもとに毎年のテーマや内容、会場の演出、オブジェ制作など全てを実行委員会で決定し、参加者が協力し作業を分担しながら準備してきました。

３．実績

毎年、秋から冬の時期に開催することを原則に、2001 年の国際会議でのイベントも入れれば 19 年開催を続けてきました（2020 年は新型コロナウイルス感染拡大防止のために中止）。このイベントは、強く何かを発信するというよりは、仙台の環境活動に関わる多くの人々がゆるやかにつながり集う場として定着しており、ほぼ毎年参加を続けている団体等も多くなっています。

環境フォーラムせんだいに参加する団体は、2011 年からの資料では、19～24 団体が参加しており、最近では 18～20 団体で推移しています。参加者も 1,000 人から 1,500 人の間で推移し、最近の参加人員は 1,000 名強となっています。教育委員会の行事があった時は、午前中にたくさんの参加者が来ていました。現在は、ステージ発表とブース展示で行われていますが、以前は環境問題に関する 3 分動画の発表審査会などを行っていた時期もありました。現在、この事業の運営には、FEEL Sendai の担当委員は入りますが、実行委員会方式で行われており、実行委員会の執行部には、最近学生たちが積極的に参加するようになりました。こうした取り組みは、全国の国連大学 RCE のユース会議に参加して発表しています。

各団体が取り組んでいる環境への取り組みの紹介として、工夫を凝らしたブース展示発表を行っているほか、FEEL Sendai で取り組んでいる「杜々かんきょうレスキュー隊」「〔環境社会実験〕未来プロジェクト in 仙台」等の事業も紹介され、合計で 20 前後のブース展示とステージ企画が催されています。イベント終了後には、環境フォーラムせんだいの活動記録として、毎回、報告書を作成しており、きちんと記録が残っています。

表は、2004 年以降、環境フォーラムせんだい事業となってからのキャッチコピーです。キャッチコピーは、毎年、実行委員会で議論をして決めています。並べてみると現代で議論している SDG s（持続可能な開発目標）の各ゴールが含まれていることが分かります（下線部）。

●表：「環境フォーラムせんだい」のキャッチコピー

年次	キャッチコピー
(2001)	環境国際会議
(2002)	仙台環境新世紀
(2003)	地球温暖化問題
2004	グリーン購入フェスタ
2005	環の学校へようこそ~地球はみんなつながっている
2006	環の学校へようこそ～身近な暮らしと環境の未来
2007	ストップ・ザ・温暖化！＾私たちのできること
2008	子供たちに残したい青い地球～　一緒に考えよう！私たちの衣食住
2009	子供たちに残したい青い地球～　エコでいくべ！ストップ・ザ・温暖化
2010	環の学校へようこそ～仮想エコシテイ・2020 年の仙台
2011	“環境“～震災で見えてきたこと
2012	S から始めよう♪環の楽園
2013	残したい地球　作りたい未来　みんなで咲かせよう環境の花
2014	あした話したい！環境豆知識
2015	手をつなごう！地球の仲間たち
2016	杜の楽校へようこそ
2017	みんなでつなぐ環境の輪
2018	ここからスタート！小さな一歩
2019	知って得する環境学習～新しい時代！環境をもっと身近にしよう
2020	コロナ禍で中止

４．評価

参加する団体は、毎年ほぼ固定化してきていますが、ブース発表内容は毎年新しい企画や全体テーマに見合ったものにしながら行われています。また、ステージ発表も、最近再び内容が充実し始めており、実行委員会が参加団体とともに定期的に行われていて、その議論がしっかり反映されている点として、評価ができるでしょう。また、全体テーマが ESD や SDGs を意識したものになってきていることも評価できます。2019 年から、開催時間を午後だけにする方式に転換しています。参加団体の準備にかける時間が短縮され、参加しやすくなった反面、光のページェントの参加者をあてにした形となっており、この点の評価は分かれることになるでしょう。

「継続は力なり」で、ゆるやかではあっても、長年に渡り普及啓発し続けてきた実績は大きく、続けることで少しずつでも環境問題の重要性に気付いた参加者は多くいると思われます。今後、この点を強く発信していくことが大切でしょう。仙台地域で環境活動を行う人々は数多くいますが、同じ土俵で並列につながって意見を交わし、企画をする機会は本事業以外にほとんどなく、貴重な機会となっています（企画に関わることなく出展するだけのイベントは他にもある）。

こうした機会を継続していくことが大切であるとともに、その内容を市民の関心にあったものにしてくことも大切です。イベント当日に行ったアンケートの、「もっと知りたい内容は？」という質問に対して、一番多かった回答は、近年の台風の巨大化の影響からか「気象変動や温暖化」でした。

５．課題

実行委員会方式は維持するものの、そのスタッフをどのように育てていくのかが課題になっています。また、ブース参加団体の増加も課題となっており、「〔環境社会実験〕未来プロジェクト in 仙台」に応募している高校生や市民団体の参加を呼び掛けていくなど、FEEL Sendai の他の事業に参加する団体に、継続して展示発表をしてもらうようお願いしていくことも必要かもしれません。ステージ発表の工夫も課題ですが、以前のような 3 分ビデオの公募のような企画も参考になります。

当初は参加者有志が自ら実行委員会を立ち上げた経緯もあり、実行委員会メンバーの結束が固く、地域のお祭りのような一体感がありましたが、高齢化や様々な理由から当初メンバーが抜けたり変わったりしたことで、現在は以前ほどのモチベーションがなくなっていることは否めません。メンバーの高齢化に直面し、若い層に入ってきてもらうために、数年前から実行委員会の中心メンバーを大学生が担っていますが、大学生は当然毎年入れ替わりがあり、次の年への引継ぎが難しいという課題もあります。

また、評価の項で記載したようにゆるやかな普及啓発を続けてきたため、継続して機会を作り続けている価値は大きいものの、具体的成果がどれだけあるのかは評価が難しいです。環境問題が危機的状況に来ている現在、成果の見える化や、普及啓発から実効性のある活動への転換が求められる中で本事業をどう位置付けていくかが課題となっています。

環境フォーラムせんだいへの参加者には、環境への取り組みに関心もってもらえますが、やはりもっと多くの市民が参加できるようにするためにはどうしたら良いかが課題となっています。また、多くの市民が関心を持ち参加できるようなテーマとして SDGs

やESDを取り入れていくことも課題となっています。

６．今後に向けての提案

環境フォーラムせんだいは、参加する団体の層と参加団体数を拡大していくことが大切です。地球環境・地域環境を持続可能にしていくためには、広く市民団体や高校、大学の参加を呼び掛け、様々な角度から啓発を行う必要があります。現在、高校生の環境甲子園の発表がステージ展示で行われていますが、以前の環境甲子園応募校がブース展示発表を行うようにするなども良いのではないでしょうか。

また、実効性のある活動が求められるとはいっても、そこに絞ると熱心な人たちだけの活動となる懸念もあり、ついていけない人も出てくることが考えられます。実効性のある活動と並行して、ゆるやかな普及啓発を続け、気づきを与えることも重要な活動なので、本事業はそうした役割と割り切り、現在の形を継続していくことも一つの方法です。しかし、コロナ禍において、来年度も集客を基本とする活動ができる状況なのかは現時点で未定です。そこで、これまで行ってきた環境フォーラムせんだいに一区切りつけ、違った形でのイベント（たとえば実行委員会の主要メンバーによるパネルディスカッションのオンライン配信、各団体から啓発動画を募集し視聴者投票による動画コンテストを行う、など）に思い切って転換するという手もあります。

この事業は、参加者を増やすための広報のありかたや、参加した方々に環境問題をより身近に感じてもらうための工夫をどうしたら良いかが課題です。特に、これから環境を創り担う世代の子供達が来年も参加したいと思える様な内容の工夫も重要です。例えば、実験的なもので、手で触って楽しめるものや（肌で感じて貰う）、小さな体験ができるものなどを取り入れていくことも大切です。また、小学生・中学生の参加を増やすためには、以前のような教育委員会の行事との共催や、学校との連携をとり、例えば、授業の一環として複数の小中学校のクラスが参加して、発表やブース展示をすることなどが必要になるのではないでしょうか。

せんだい環境ユースカレッジ

１．概要

せんだい環境ユースカレッジは、仙台市内在住の学生や社会人を対象に、環境に関する知識や経験を得ながら、環境活動を実践している人とのつながりを通して、若い世代を環境教育・学習に携わる人材として育成していくことを目的とした事業です。仙台市内で活動している環境 NPO の実践活動に参加し、FEEL Sendai が行っている杜々かんきょうレスキュー隊の活動を体験することもできます。また講師やメンバー同士との講義・討論の学びを通じて、関心のある環境問題のテーマを取り上げ、環境フォーラムせんだいで発表して、市民との対話を体験することができます。

２．経緯

この事業は、2010 年度に、環境に関する知識や経験を得ながら、環境活動実践している人とのつながりを通して、若い世代を環境教育・学習に関わる人材として育成していくことを目的として設立しました。活動では、『環境講義による学習』、『環境活動体験』、『環境フォーラムせんだい参加』の 3 つのカリキュラムを通して環境に関する知識・経験を深めるとともに、受講生同士や環境 NPO 団体との交流などの「環境に関わる人とのつながりづくり」を支援しています。ここ 10 年間で 94 名の修了者を出してきました。

３．実績

受講対象は 18 才から 30 代（大学生・専門学校・社会人）です。大学・短大・専門学校（9 校）からの参加があり、異職種の社会人受講生は、10 回のうち 7 回の参加があり各々が積極的な関心をもって参加していることが感じられます。緩やかですが若い世代による環境活動への関心の幅が広がってきています。

●表：せんだい環境ユースカレッジ実績

年度	受講生	修了者	所属
2010	20	14	東北大、宮城教育大、東北学院大、東北福祉大、宮城学院女子大、尚絅学院大、社会人
2011	12	10	東北大、東北福祉大、東北学院大、東北工業大、社会人
2012	11	10	東北大、宮城教育大、東北福祉大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大
2013	13	13	東北大、宮城教育大、宮城大、東北福祉大、東北学院大、東北工業大、仙台青葉短期大
2014	7	6	東北工業大、宮城学院女子大、社会人
2015	12	10	東北大、宮城大、東北工業大、白百合女子大、社会人
2016	17	11	宮城教育大、東北福祉大、東北工業大、白百合女子大、尚絅学院大、仙台青葉短期大
2017	30	9	東北大、東北福祉大、仙台青葉短期大、社会人
2018	9	5	尚絅学院大、宮城学院女子大、宮城大、社会人
2019	8	6	東北大、東北工業大、社会人
2020	0	0	新型コロナウイルス感染症拡大により活動中止
計	139	94	

『環境講義による学習』では、「ESD/SDGs と FEEL Sendai 」、「ESD・持続可能な社会とは！」や仙台市の環境政策である「杜の都の環境都市づくり」、「仙台市環境行政-環境教育と歴史-」といった内容を中心に環境教育基礎編の座学を開いていきます。併せて、環境団体の活動「仙台市省エネ・節電運動」「生物多様性とは-」「地球温暖化に関する科学的評価」他、多団体の活動内容を紹介する時間もつくり環境問題の“見える化”を進めてきました。

また、東日本大震災が発生した 2011 年以降の社会は“防災教育”に移行しつつありましたが、せんだい環境ユースカレッジでは、被災した沿岸部の環境から仙台の環境問題を理解する活動につなげました。例えば、「震災復興と NPO の動き」、「環境再生と NPO 活動」、「被災地沿岸部の緑の再生」について、環境活動団体の話を聞くなど、防災教育と環境教育を関連付けることで、講義の内容が深まっていきました。

ほかにも、講義の時間を活用して、「二酸化炭素を減らしながら豊かな環境国を目指す環境カードゲーム（ガバチョ）」を紹介し、その体験を通して受講生同士の交流をする場を設けました。交流会の発案者は前年度の社会人修了生で現在は FEEL Sendai 委員としてこの事業と関わりながら環境問題に取り組んでいます。

『環境活動体験』では、環境に関する講義をスタートに、FEEL Sendai 関連団体・NPO 団体及び行政の協力で実施プログラムに参加し活動体験を行います。各団体のプログラムも環境問題の分野が様々であるため、受講生の多種多様な関心を活かすことができます。このプログラムでは受講生が自ら、関心がある活動を選択し、体験活動への参加を通して多くを学んでいきます。『環境活動体験』は受け入れ団体や受講生同士の交流の場となり、体験をすることと合わせて、身近な環境課題への取り組みと気づきを見出すきっかけとなっています。

活動の事例として「幼稚園・保育所・小学校・市民センター等への出前講座」「市民

共同企画・体験」「行政企画型の体験」等の各プログラムがあります。(以下過年度のプログラム例)

・いぐねの学校（夏・秋）
・ベガルタ仙台ホームゲーム
・朝市夕市ネットワーク販売体験-地産地消にまなぶ-
・はじめよう緑なライフ（緑のカーテン効果測定）
・はじまりはいのちの粘土だんご
・仙台市東部/被災地の環境観察と記録
・広瀬川清掃ボランティア活動
・仙台平野の被災と環境再生-居久根探訪-
・宮教大キャンパス-ミュージアム体験（動物とのふれあい）
・杜々かんきょうレスキュー隊
・四ツ谷用水をたどる-仙台を学ぶ-（八幡町編・街中編・河原町編）
・被災地支援（仮設住宅での支援・交流会）
・グリーンバード仙台-街中清掃活動-
・貞山運河界隈の自然観察フットパス
・ヨシ原をめぐる生きものたちの夏物語

最後に、『環境フォーラムせんだい参加』では、活動及び自主テーマ等の自主企画発表を行っています。『環境講義による学習』や『環境活動体験』を通して得たことを受講生同士が互いに振り返りながら共有しあい、その都度、環境フォーラムせんだいへ参加するためにテーマを考えます。受講生たちは時間の都合をつけながら準備を重ねて、会場にブースを設けて参加をします。当日、会場では、これまでの学習・体験から学び・考えた環境問題について、参加者の目線に立ち、参加者と一緒に考える環境づくりの一役を担います。また、環境フォーラムせんだいの会場では、他の環境活動団体と交流することができ、１年間の成果を発表する場としてだけでなく、充実した学びの場にもなっています。若い世代の受講生が考える環境問題の発信方法は型にはまらず斬新で目を見張るものがあります。

４．評価

毎年、活動内容は報告書用にパワーポイントで作成され、活動の内容がわかりやすく整理されています。

『環境講義による学習』の内容は基礎編として受講生の環境意識が高まるように講義内容等を考えて毎年スタートしていますが、体験活動への取り組み方や環境フォーラムへの参加の取り組みは、受講生（大学生と社会人）人数のバランス等で受講回数を重ねるごとに参加意識の差が大きくなります。各年、受講生の参加意識が様々であることが見えてきたので、FEEL Sendai の参加団体の活動に参加することで自ら体験し、団体や受講生同士の交流の場となるように考え、環境問題への考え方や関心度を互いに高め合うことができるよう工夫をしてきました。

また、修了した受講生が次年度に FEEL Sendai 委員（せんだい環境ユースカレッジ事業担当）として積極的に受講生と関わり意欲的に活動を続けているほか、少人数ですが、社会人受講生の参加意欲は高く、ユースカレッジに参加したことで家族や職場内で環境

について話題とする機会が増えていったことが報告されています。これらのことから、この事業は、受講生だけでなくその周りにも、環境への関心を広げていることが分かります。実際に、「修了後の受講生から、せんだい環境ユースカレッジ事業の話を聞いて、関心を持った」という若者からの問い合わせがあったことを考えると、修了した受講生は当事業の目的を理解し活動に参加していたことが見え、若い世代に当事業が理解され、次代へ引き継がれていると考えられます。

ほかにも環境問題に取り組んだことが仕事でも役にたっている、との声も聞こえてきました。

５．課題

『環境講義による学習』、『環境活動体験』、『環境フォーラムせんだい参加』の３つの柱からなるカリキュラムは、講義の講師陣や体験学習のメニューも充実しており、この点の課題はあまり無いと言えます。

しかし、この３つのカリキュラムをコンスタントに進めていくには７月から 12 月まで、月１回の参加が必要になり、一部のカリキュラムを欠席してしまうと、十分な効果が得にくいという課題があり、活動に欠席しないで参加してもらえるよう、受講生の問題意識や参加へのモチベーションを高める取り組みが必要となっています。そこで、最初の講義の時間を使って、受講生同士のコミュニケーションをとるイベントを行うなど、工夫がされていますが、学業や仕事などで多忙である受講生にとって、全て欠かさず参加することは難しく、今後もこの点の強化が課題となっています。

また、受講生数の確保が難しく、受講対象の若者世代にこの事業への興味を持ってもらえるような取り組みは、毎年の課題となっています。

６．今後に向けての提案

若者世代にとって、せんだい環境ユースカレッジに参加して行う６ヶ月間（6 回）の活動が、今後の環境問題を考えるスタート地点とするなら、受講生の受け入れ方と活動内容の工夫が必要です。

まずは、安定した受講生の確保ができるよう、せんだい環境ユースカレッジの活動内容や FEEL Sendai の活動記録を公開するほか、本年の取り組みで作成された動画等を活用して FEEL Sendai の活動を紹介するなど、若者世代に興味を持ってもらえるような声かけをしていく必要があります。しかし、興味を持って集まった受講生たちも、時間の調整が難しく、月１回の活動全てには参加しづらいといった課題もあります。そこで、そういった多忙な受講生が参加できるように、講義や環境フォーラム企画会議をオンラインで参加可能にするといった開催方法も参加回数を増やすための工夫として考えられます。また、参加している受講生の意識については、若者世代が関心を持っている「身近な環境問題＆共生」等の掘り起こしを行うことで高低差を縮めることが期待されます。

受講生同士の交流や体験活動の受け入れ先団体との交流も課題とされてきましたが、FEEL Sendai 委員同士で、お互いの団体の情報（活動内容）を理解し合うことで、受講生の興味・関心と各団体をつなげる役割を担ってはいかがでしょうか。そうすることで、FEEL Sendai 委員が、受講生同士や、受講生と各団体とのつながりを強くし、活動を充実させることができます。

また、活動内容の工夫については、2030 年までの「地球環境」「地球社会」「地域社会」の課題解決の目標である SDGs の取り組みと、そのための人材育成・学習活動（ESD）に見合ったカリキュラムの修正を考える必要があります。さらに、これまでも受講生が参加しやすいように、と考えていたカリキュラム内容ですが、活動期間に合わせてストーリー性のある活動内容で進めていくことで、次回の内容への関心を高め、参加への意欲を高めることができるのではないでしょうか。

【資料編】

●表：[環境社会実験]未来プロジェクト in 仙台　実績一覧（採用プロジェクトのみ）

2001 年度：応募件数 14 件／採用件数 4 件

企画名	団体名	企画内容
子どもエコ調査隊が行く	ＡＣＴ５３「はっぴぃ～あくとプロジェクト」	エコ文房具についてのワークショップ、調査（お店を含めて）
仙台平野のいぐね（屋敷林）を観察するための「いぐね学校」開催	仙台いぐね研究会	仙台平野のいぐねの仕組みを理解し、環境教育の教材として活用する。
環境配慮イベント実験	水環境ネット東北、ＡＣＴ５３、仙台風倶楽部、コミュニティ・アーバンネット	・七夕飾りウォッチング ・七夕クリーンウォーキング ・おやすみどころ運営（ごみ分別、エコ七夕作成等） ・七夕飾りのリサイクル・リユース ・竹のリサイクル・リユース
生ごみ～地域農業の循環システム実験～	ＥＰＦ環境・人間・食料ネットワーク/仙台生ごみリサイクルネットワーク/朝市・夕市ネットワーク/街づくり政策フォーラム	・生ごみリサイクル実験（生ごみ収集～堆肥製造実験） ・生ごみリサイクル堆肥での農産物生産、流通実験 ・学校給食にリサイクル堆肥農産物利用の実験

2002 年度：応募件数 12 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
新考案による新聞ストッカーの実用実験	旭ヶ丘中央町内会	現在の新聞ストッカーの問題点を改善し、町内会挙げて取り組むことにより、地域社会の環境意識の高揚と、環境負荷の確実な低減が期待できる。 ・問題点解決のための新しい新聞ストッカーの考案 ・モニター実験の実践(800世帯)
広瀬川の清掃活動を契機とする広瀬川環境フォーラムの開催	特定非営利活動法人　水環境ネット東北	市民や市民団体との連携により、「広瀬川1万人委員会」を立ち上げ、広瀬川の清掃活動と広瀬川環境フォーラムを実施し、市民の環境意識の向上を図るもの。 ・フィールドマナーの普及 ・ごみの分別回収による発生源の考察
リサイクル野菜実験	リサイクル野菜ネットワーク	学校給食の生ごみや家庭用電気式生ごみ処理機を使用して作った堆肥を、地域農業に還元し、環境にやさしい農産物を消費者や学校給食に届けるもの。 ・リサイクル野菜を消費者に普及させる実験 ・リサイクル野菜を学校給食に提供する実験

2003 年度：応募件数 14 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
市民協働・環境社会実験in広瀬川 「広瀬川／河川清掃から・作ろう仙台環境物語」	特定非営利活動法人　広瀬川の清流を守る会	広瀬川の河川環境保全による温暖化防止と啓発。エコマネー利用によるコミュニティ形成と、企業会員による協力展開を図る。 ・グリーン（環境）・クリーン（美化） ・バリアフリー（高齢・障害者の参加）をキーワードに、広瀬川の清掃を実施する。 ・エコマネー利用による環境配慮型の町づくりを目指す。
仙台スタジアムごみ減量大作戦	（財）みやぎ・環境とくらし・ネットワーク	仙台スタジアムのごみ減量の取組みにより、地域と地球環境を大切にするを広げる。 ・スタジアムから出るごみの内容・労を調査する。 ・分別・回収方法の改善を図る。 ・売店でのリユースカップの導入により根本的にごみ減量を図る。
竹の灯り回廊めぐりプロジェクト	街角仕事人くみあい	七夕祭り→竹の灯り→竹炭への再生→環境浄化という竹のリサイクルを通した取り組み。 ・七夕祭りで使用した竹の回収と、切り出し。 ・竹の灯り作りと、竹の灯り回廊“ばんぶーら小径”づくり。（メディアテークを起点に、肴町肴親和会など5町内会のまち中を通り、桜岡神宮参道を通って大橋下の広瀬川河川敷を終点とした回廊）…8/9に実施 ・県内授産施設「虹の園」との協働による竹炭づくり。 ※“ばんぶーら小径”「バンブー」と「番ブラ」からつくった「竹の灯り回廊」の愛称。

2004 年度：応募件数 7 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
土・風・水のコラボレーション効果の検証～仙台の里山・田園を保全するために、仙台21プランの実現～	特定非営利活動法人　まちづくり政策フォーラム	里山・田園の持続的活用を支える仕組みづくりを、土の人（地域で自ら実践する人＝地元住民、行政）、風の人（外から地域に訪れ、その地域の魅力を発見する人=主に都市住民）、水の人（土を応援し、土と風を結びつける人＝ここではNPO）が、それぞれの立場から案が絵、現実化への方策を実験します。
市民が使いやすい分別ステーション	ACT５３仙台	イベントに数種類のゴミ分別ステーションを設置して、使いやすさ等について比較分析します。また、回収した資源ごみ（有価物）を基金にして、水源地（七ヶ宿）に植林活動をし、都市住民が水源地を考えるきっかけ【以下文章切れ】
仙台スタジアムごみ減量大作戦Part2	(財)みやぎ・環境とくらし・ネットワーク	「ベガルタ仙台」の仙台スタジアムでの主催試合において、根本的なごみ減量システムの確立を目指すとともに、サポーターにごみ分別・減量を呼びかけ普及啓発を行います。 ・マイバッグ普及などによるレジ袋の削減 ・弁当から出る生ごみのリサイクルの可能性検討

2005 年度：応募件数 9 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
「広瀬川一万人委員会」～21世紀の仙台の環境を考える	水・環境ネット東北	100万人の1%の1万人をキーワードに、地域・市民団体・企業等で河川清掃を実施、広瀬川やゴミ問題を考えるきっかけとする。
SENDAI光のページェント「光の貯金―省エネってきれいだな」	光の貯金実行委員会	「光のページェント」に先駆け家庭の電気の節約を促し、節約した電気でページェントの灯りをともすという意識を持ってもらう。ページェントを通して省エネを実感し【以下文章切れ】
バス・バスターズin my town	水魚方式研究会	伊豆沼の人口産卵床の成果に学び、仙台における有効なバス駆除方を見出し、発信する。

2006 年度：応募件数 5 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
仙台笹舟プロジェクト２００６	特定非営利活動法人　笹舟	「みる七夕から、つくる七夕へ」 仙台七夕の時期に「人が乗れる笹舟」を広瀬川の河川敷で市民と一緒に製作・乗船し、広瀬川と七夕を満喫してもらう。後に舟を炭化して山もしくは畑に戻す。 そして冬に、夏広瀬川で遊んだ笹舟の材料「笹」が里山でいまどのような状態になっているか、里山に入ってもらい見学。同時に里山整備を兼ねて「笹刈り」を行【以下　文章切れ】
エコバス・普及啓発大作戦～乗って減らそう！二酸化炭素排出量～	特定非営利活動法人　まちづくり政策フォーラム	運行情報（仙台市内のJR・地下鉄・バスの路線、駅での乗り換え、時刻表・運賃、主要施設までの案内など）を情報冊子で補うことによって、「移動手段を自家用車から公共交通利用選択を転換させることが出来るかどうか」を実験します。あわせて公共交通を利用するたびに「貢献度グラフ（環境家計簿）」を記入し、CO2削減への貢献度を実感してもらえるようにします。
みちのくEMS：エコ売店評価システム	ワンダフル仙台	イベント用の評価システムの構築 調査、実験、効果を検討します。 1.仙台で開催されるイベントと連携しその出展の数、販売するもの、販売する形態、使用する容器、廃棄の方法等のチェックリストを作り、徹底的な調査を行う。 2.リユース食器(ワケルモービルなど）を活用し、リユースという方法の啓蒙を行う 3.リユース方式採用の出店に高得点をあ与え、出店を評価、後日優良出店者に表彰を行う。

2007 年度：応募件数 6 件／採用件数 2 件

企画名	団体名	企画内容
プロジェクトV！美味しい野菜（ベガベジ）で勝利をつかめ！	せんだいプチファーム	「はやね・はやおき・あさごはん」国民運動の啓蒙として、プチファーム富田農園での「はたけびらき（植えつけ）「農作業体験教室」「収穫まつり」などの農作業を通じて、地域に密着した新しい形のコミュニケーション構築と宮城・仙台の風土を生かした食文化への関心を促す。 ・はたけブログの開設 ・はたけサポーター活動（はたけ管理に参加） ・収穫作物をベガルタ選手に食べてもらい、レシピ公【以下文章切れ】
かんきょうエコチャレンジ教室	NPO法人　みやぎ環境カウンセラー協会	科学館や東北電力、学校、PTA、NPOなどが担当し各団体が環境屋台を作る形でのイベントの開催

2008 年度：応募件数 4 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
「水の神さま」を探せ～「水の神さま」マップづくり～	（財）みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）	仙台市周辺の「水の神さま」調査、マップ作成と「水の神さま探検ツアー」の実施
仙台笹舟プロジェクト２００８	NPO法人笹舟	仙台七夕の時期に「人が乗れる笹舟」を広瀬川河川敷で製作、乗船してもらう。後に舟を炭化して山もしくは畑に戻す。冬には「笹」の様子を知ってもらうため、里山見学を行い、笹刈りを行う。
まちなかまるごと絵本	ハート＆アート空間“BEI”	親子対象のリサイクルペーパー・ダンボールを利用したコラージュによる絵本作りの実施

2009 年度：応募件数 3 件／採用件数 2 件

企画名	団体名	企画内容
「知ろう！気づこう！再生しよう！あなたの街の四ツ谷用水」	「四ツ谷の水を町並みに！」市民の会	四ツ谷用水について広く知らせるとともに、水と私達のくらしに費え考えるような講演会、カルタ等を活用した活動を行う。
川をよごす『“雨水くん”を救おう会』の設置	仙台リバーズ・ネット梅田川	雨水を直接下水に流れ込ませないように一次貯留、地下浸透させる等、河川水量の増加、水質汚濁の改善に向けて市民が出来る取り組みを啓蒙するための活動を行う。 ①啓蒙フォーラム開催（川の水は何故なくならないの・下水道探索等々） ②「水循環青空教室」の設置 ③関係データの収集（地下水の流出量） ④啓蒙資料の作成　他

2010 年度：応募企画 8 件／採用件数 5 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「街からゴミを減らし隊」	泉・新エネルギー探検隊	物の大切さ、ゴミを減らす意味等が分かるような講義を独自に行う。対象は、小学校中学年とその父兄。
【環境の芽部門】環境教育支援教材『蒲生干潟クイズ』の作成	”GACHIプロジェクト”	蒲生干潟の自然や歴史や、活動を扱った環境教育支援教材『蒲生干潟クイズ』を作成し、地元の小学校などに配布する。
【環境の芽部門】人と人との繋がりが生物多様性　第2の危機を食い止める！	こよみのあしおと	手が足りていない農家と、農業を手伝いたい人とのコーディネータになる。
【環境の樹部門】リサイクル野菜システムの再構築	リサイクル野菜ネットワーク	乾燥生ゴミから安心・安全な堆肥ができる仕組みを市民に啓発するシンポジウムを実施する。
【環境の樹部門】プロジェクトR！ごみ減キャンパス！！	環境サークルRNECS	大学キャンパス、サークル棟への新たなごみ箱の設置。設置後も、分別が行われているか調査する。他大学を訪問し、呼び掛けを行う。

2011 年度：応募企画 4 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「被災農家さんの現状を知り、できることに取り組もう！」	こよみのあしおと	下記３点を通じて、被災した農家さんの復興の手助けを行う。 （１）瓦礫撤去・農作業イベント （２）少人数で農作業のお手伝い （３）生物多様性の講義
【環境の樹部門】仙台平野におけるいぐね被害調査	仙台いぐね研究会	居久根が東日本大震災で受けた被害を調査し、ワークショップを行う。また、調査結果を踏まえて、”いぐねマップ”を作成する。
【環境の樹部門】見直そう！ライフスタイル	生活共同組合あいコープみやぎ　石けん環境委員会	・環境負荷低減のため、石けん利用と使い方の学習会を行う。 ・化学物質に頼らない”ハエとりペットボトル”を広げる。

2012 年度：応募企画 4 件／採用件数 4 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「梅田川ふるさといろはカルタ」作り	梅田川ふるさとづくり委員会	梅田川に関するカルタを小学校、老人会、ケアーセンター等と連携して作成し、梅田川の環境啓発を行う。
【環境の芽部門】「植えた人が責任を持って手入れをする」プロジェクト	仙台市森林アドバイザーの会	イベントなどで植樹された樹木はその後放置されており、かけた経費や労力が無駄になってしまっているため、除草等を通じて環境を改善する活動を行う。
【環境の樹部門】「地球に優しい農業を知ろう！」	NPOこよみのあしおと	既に行ってきた当該団体の活動参加者を増やし生物多様性の啓発を強化するため、農作業イベントだけではなく勉強会や座談会、食べる会を企画する。
【環境の樹部門】「『出店のゴミ抑制』及び『他イベントへ広がれ！』プロジェクト」	仙台ゴスペル・フェスティバル実行委員会	ゴスペルフェスティバル時の出店のゴミ抑制を行うべく、ノーレジ袋やマイ箸持参を呼びかける企画を実施する。その際には、他のイベントにも当該活動が普及するような工夫を凝らす。

2013 年度：応募企画 7 件／採用件数 6 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「炭を焼こう、炭で遊ぼう、炭に学ぼう」	青葉山炭人の会	剪定枝を用いて、炭焼きの実演・実習・講義を組み合わせたイベントを実施。簡易な炭化器を用いて作る炭の魅力を伝え、町内会単位などで炭作りが普及することを目指す。イベントは子どもや剪定枝処理に悩む市民を対象とする。また、NPOスタッフとの連携も模索する。
【環境の芽部門】「身近な物からはじめる環境への意識向上！プロジェクト！」	NPO法人仙台・みやぎ消費者支援ネット	古布、牛乳パック、ビール缶を再利用した小物等の作品作りイベントを行う。イベントは、市民センター等で行う予定であり、子どもから大人までを対象とする。また、これまでのように、呼ばれたところに出向く活動に加え、団体自らが参加者を募る形でもイベントを実施する。
【環境の樹部門】「環境映画上映会」	環境サークルRNECS	「第４の革命～エネルギーデモクラシー～」、「モンサントの不自然な食べ物」という環境に関する２つの映画の上映会とワークショップをセットにしたイベントを実施。ワークショップの際には、参加者各自に環境行動計画を作成してもらい、後日、達成状況について発表会を行う。映画上映会から報告会までの間にはFacebookを通じた情報交換を行い、持続的な活動に繋がるような工夫も行う。他大学の環境サークルやNPO法人との連携も想定している。
【環境の樹部門】「梅田川の宝探し！」	仙台リバーズネット・梅田川	「ゴミ」は本来、資源であり、また、想い出等も詰まった「お宝」であるという意識改革を行うことで、ゴミの不法投棄を未然に防止することを目指す。併せて、河川清掃の参加者増員も目指す。その一環として、子供達がゲーム感覚で遊べるような啓発ツール（カード等）の作成や啓発講座の開催を行う。啓発ツールは今後も持続的に使用できるような物を作成する予定。また、実際の河川清掃の際には、これまで交流のなかった上流や下流地域の団体との連携も想定している。
【環境の樹部門】「写真に収めて心に刻もう！私たちの地域の環境」	NPOこよみのあしおと	農作業イベント時に畑の風景や生物を写真撮影し、地域環境を見つめられるような機会を作る。撮影した写真にメッセージをつけたものを用いて、写真展イベントを開催する。こうしたイベントを通じて、参加した一般人や他のNPOとの交流を行う。
【環境の樹部門】「梅田川カレンダーを作ろう！」	NPO梅田川ふるさとづくり委員会	小学生の協力のもと、歳時記的な要素を加味した梅田川カレンダーを作成し、周辺施設等に配ることで河川保全の啓発を行う。小学生には事前に、梅田川流域の映像鑑賞会や講演会等に参加してもらい理解を深めてもらう。その上でカレンダーに使用される絵を書いてもらい、そこに当団体が収集した梅田川に愛着を持てる情報を加味するというプロセスのもと、梅田川カレンダーを作成する。

2014 年度：応募企画 5 件／採用件数 4 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「長町二丁目公園　芝生化プロジェクト　試行実施」	長町二丁目公園愛護協力会	砂ぼこりの発生している地面を芝生化し、子供たちが裸足で安心して遊べる公園にする。芝生のポット苗の育成や植え付けに当たっては町内会をはじめとする地域住民と協力し、地域のコミュニケーションの輪を広げる。
【環境の芽部門】「七北田川河川敷きにレンゲ畑を造ろう！」	ガールスカウト宮城第21団	七北田川河川敷にレンゲ畑を造ることによって、市民に憩いの水辺空間を提供するとともに、レンゲ畑作り体験をとおして、子供達の自然への関心を高める。市民の七北田川への関心を高め、河川敷へのごみ投棄を防止する。開花した花を地元の小学校などに寄贈し、次年度以降へつなげる。
【環境の芽部門】「仙台の津波からの自然再生プロセスを、世界に発信する」 ※樹で応募、芽で採用	一般社団法人　東北ソーシャルデザイン研究所	東日本大震災の津波の被災後、人工的な手を加えずにそのまま残る井土浦地区の自己再生力による再生プロセスを観察し、世界に発信する「語り部」を育成し、後世に伝えていく。
【環境の樹部門】「給食残さの堆肥づくりとペープサートを使った幼児の「食の循環」体験づくり」	公益財団法人　みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（ＭＥＬＯＮ）	保育園などの給食の残さを堆肥化して園の畑やプランターで使用し、「食の循環」を幼児が体験する教材に変える。 ・残さのコンポスターへの投入体験やペープサート上演を見ることにより、幼児の理解を促進する。 ・実施の手引きを作成し、幼稚園と保育園各１園で行っていたプログラムを他の幼稚園等に広げることを目標とする。

2015 年度：応募企画 4 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「目指せ！里山の小達人」（里山の自然を感じ、体験し、つなげよう）	あわの結び舎	里山での様々な体験活動を経験し、自然への関心を高め、楽しみながら自然について考える。
【環境の芽部門】「広げよう自然遊び！知って遊ぼう植物のこと」	仙台白百合女子大学「Nakamura farm」	身近な植物を教材にした環境プログラムを作成・実践し、その成果をホームページ等で発信する。
【環境の樹部門】「井土浦・藤塚マップ作成事業－仙台海浜の魅力の発信」	せんだい生態系再生コンソーシアム	井土浦・藤塚の生態系の回復について観察会などで学びながらマップとしてまとめ、仙台の海岸の魅力を発信する。

2016 年度：応募企画 3 件／採用件数 2 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「知ることは守ること！みんなで守ろう仙台のトウホクサンショウウオ」	仙台城南高等学校自然科学部	準絶滅危惧種であるトウホクサンショウウオについて多くの人に知ってもらい、保護活動を広めていく。
【環境の樹部門】「つなげよう！里山の『わ』（仙台の里山の自然を共に感じ、学び、伝えよう）」	あわの結び舎	里山での様々な活動を通し、自然の素晴らしさ・大切さについて感じてもらう。

2017 年度：応募企画 3 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「広瀬川の魅力再発見プロジェクト（上流編）」	広瀬川市民会議	広瀬川の環境保全と市民に新たな魅力を発見してもらうことを目的とし、上流域で実際に川に入って現状と課題を把握する「探訪会」と探訪会で発見した課題や魅力を発表する「報告会」を開催する。
【環境の樹部門】「里山は遊び、学びの宝庫～里山で増やそう！FEELな仲間～」	シンプル＆スローライフの会	里山の資源を活用した大変型のワークショップを通し、里山自然を暮らしに生かす知恵を身に付けてもらう。若い世代と連携し、環境意識を次世代に伝える。
【環境の樹部門】「知ることは守ること！みんなで守ろう仙台のトウホクサンショウウオ」	仙台城南高等学校自然科学部	身近に生息するトウホクサンショウウオについて知ってもらい、生息環境の維持の必要性を伝え、生物保全活動への関心を高める。

2018 年度：応募企画 3 件／採用件数 3 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の樹部門】「エナジーカフェ」	NPO法人環境エネルギー技術研究所	暮らしに役立つ省エネ・創エネのコツやミニ太陽光発電DIYなどをテーマとして「エナジーカフェ」をとおして、エネルギーについての興味・関心を高める。
【環境の樹部門】「旬を丸ごと1年活かす」	NPO法人とうほく食育実践協会	生産余剰のため廃棄されてしまう農作物を使用した料理教室の実施をとおして、生産廃棄物への関心を高め、食を通した自然との共生について理解を深める。
【環境の樹部門】「杜ノ草屋根Tiny　Houseプロジェクト」	シンプル＆スローライフの会	草屋根について学び、実践し、草屋根の効果を測るという3つのWSをとおして、草屋根についての認識を深め、様々な場での実践を促す。

2019 年度：応募企画 4 件／採用件数 4 件

企画名	団体名	企画内容
【環境の芽部門】「被災地荒浜で、海岸清掃と海洋ごみをつかったアクセサr-づくりワークショップ」	環境系学生団体海辺のたからもの	海岸の清掃活動で拾ったプラスチックごみ等を使いアクセサリー作りを行う。楽しみながらゴミを回収し、海洋ごみ問題についての関心を高める。
【環境の樹部門】「植物界の『災害遺産』ミズアオイを知る連続ワークショップ」	NPO法人日本ビオトープ協会（北海道・東北地区）	ミズアオイをテーマに、生息地の観察や収穫・調理、埋土種子を探すワークショップをとおして、生物多様性と防災についての意識を喚起する。
【環境の樹部門】「みんなで『楽しく！』『面白く！』里地里山で自然体験してみよう！」	ひときたしゃべる	認知症等疾患のある方を含め幅広い世代を対象に、山や畑での自然体験を行い、環境保全意識を向上させる。
【環境の樹部門】「食用廃油の資源化」	宮城学院中学校高等学校　特活自然科学班	食用廃油からコウボの作用によりたんぱく質を作る実験により技術を確立させ、食用廃油の資源化を目指す。

2020 年度：新型コロナウイルス感染拡大により中止

●表：杜々かんきょうレスキュー隊　プログラム作成実績一覧

2003年度　テーマ：水

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	水環境ネット東北	水辺の安全コーディネート	資料無し
2	ネイチャーヴォイス	雨水がはぐくむ里山の生き物・人のくらし	
3	みやぎ生活協同組合	街かど環境ウォッチング～酸性雨編～	
4	仙台いぐね研究会	水を食べる	
5	ACT53仙台	川から海へのごみチェック	
6	水魚方式研究会	川の住民票づくり	

2004年度　テーマ：生活環境

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	仙台いぐね研究会	食育体験プログラム：生産～流通～消費～廃棄	資料無し
2	天文ボランティアうちゅうせん	星を見る楽しみを通して光害を考える	
3	ネイチャーヴォイス	みのり空間、里山で初秋の自然と暮らしを体験！	
4	土壁塗ろう会	土壁ワークショップ	
5	柳生和紙プロジェクト	自然から生まれ自然へ帰るものづくり～和紙の向こうに見えるもの～	
6	水魚方式研究会	森林へ行こう～「木の葉のイロハ」「落ち葉の１２３」～	

2005年度

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	仙台リバーズネット・梅田川	水の捜索人	資料無し
2	ネイチャーヴォイス	出動、里山たんてい団！	
3	ＮＰＯ法人環境保全米ネットワーク	バケツ稲づくり学習で“食”と“農”を考えよう！！	
4	朝市・夕市ネットワーク	旬って何だろう～調べてみよう、地元の食材	
5	水魚方式研究会	ヘビトンボにやさしい「芋煮」を科学しよう！	
6	NPO海岸保安林環境整備	畑と海岸林の不思議探検	

2006年度　テーマ：炎・明り

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	仙台いぐね研究会	昔のくらし体験プログラム：炭を使って蒸しかまどでご飯を炊こう	資料無し
2	みやぎ環境カウンセラー協会	太陽ってすごい	
3	街角仕事人くみあい	人の心に灯をともす	
4	NPO海岸保安林環境整備	炎は何から生まれたの？そしてどこへ行くの？	

2007年度　テーマ：緑

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	水魚方式研究会	台原森林公園モス・グリーン・アドベンチャー	仙台リバーズネット・梅田川
2	ネイチャーヴォイス	ケヤキだいすき！探けん隊	柳生和紙プロジェクト
3	シンプル＆スローライフの会	みどりなライフ！	

2008年度　テーマ：幼児向け環境学習プログラム

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	シンプル＆スローライフの会	はじまりはいのちのねんどだんご	無し
2	冒険あそび場ーせんだい・みやぎネットワーク	いろ色発見隊～季節のカメラマン～	
3	宮城教育大学　幼児教育研究会	宮教大ボウケンジャー～もりのおべんとうづくり～	

2009年度　テーマ：地域

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	宮城県地球温暖化防止活動推進ネットワーク	親子三世代「知恵のトライアングル」	東北福祉大環境ボランティア
2	宮城県地球温暖化防止活動推進員　みどりむしグループ	田んぼ　畑って　すごい!!～どこから来るの　私たちの給食～	水魚方式研究会
3	特定非営利活動法人　水環境ネット東北	考えよう地域の水害防災	（ネイチャーヴォイス）※審査結果では採用だったが作成無し
4	ＮＰＯ法人　笹舟	廃油キャンドルで家庭と地域、学校を繋げよう！	

2010年度　テーマ：いのちのつながり

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	ＰＷ研究会　クラブ・オーティア	給食・いただきます！つながり、発見	無し
2	シンプル＆スローライフの会	のぞいてみよう！にぎやかな土の世界	
3	ネイチャー　ヴォイス	“生きもの・にぎわい　マンダラ”をつくろう！	

2011年度　※新規プログラム作成事業を行わなかった

2012年度　テーマ：地域の復興

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	宮城教育大学自然フィールドワーク研究会YAMOI	探そう、水辺の外来種！～目指せ外来生物博士～	無し
2	カワラバン	風を感じよう	

2013年度　テーマ：わたしたちのくらしとエネルギー

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	宮城教育大学　Science Support SPINOZA	自然からのエネルギー：エネルギーっておいしいの？	泉・新エネルギー探検隊
			カワラバン
			宮城教育大学地理学研究室

2014年度　テーマ：地域の環境と防災
※応募無し

2015年度　※公募を行わずH26未来プロの団体で杜々に活用ができそうなところへ依頼

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	Science　エッグ	電気と地球環境の話～地球温暖化防止のために～	無し
2	仙台リバーズネット・梅田川	“ゴミ”本当に『ゴミ』なの？	

2016年度　テーマ：自然環境・自然の力

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	宮城教育大学自然フィールドワーク研究会YAMOI	集まれ！地球の仲間たち！～動物から学ぶいのちのつながり～	特定非営利活動法人　環境生態工学研究所

2017年度　テーマを設けず広く募集をした

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
1	※新規プログラム作成無し		Science　エッグ

2018年度　テーマを設けず広く募集をした

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
	仙台いぐね研究会	実感・体験型食教育プログラム『選ぶ・作る・食べる』	無し

2019年度　テーマを設けず広く募集をした

	採用団体	採用プログラム	不採用団体
	環境エネルギー技術研究所	校庭発電から学ぼう！-直流ワールドへようこそ！	無し

2020年度　新型コロナウイルス感染拡大により中止